

Title	仏蘭西経済学に於る価値論の発達 (三)
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.9 (1924. 9) ,p.1342(162)- 1367(187)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240901-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安品、若くは奢侈品を供給するものと考へらるゝのである。而して其の國民は、他の總ての商品を豊富に所有する他の國民よりも遙かに多く眞の富を所有するものである」(Edinburgh Review for July 1804, p. 355, quoted by E. Cannan's Theories of Production and Distribution, p. 26.)

續いて一八一〇年刊行の大英百科辭典第四版中に於ける「經濟學」なる項目の執筆者は「甚だスキスの學説を墨守するものなり」と斷言しながらも、尙ほ生産的勞働及び不生産的勞働なる區別に就て左の如く論じて居る。曰く

「今日本題に就て最も優秀なる著者は、此の區別をば無用のものとして取扱はんとする傾向がある。彼等の主張する所は、即ち生活の便宜品及び快樂品の豊富なる點にのみ存し、而して是等の物件の増殖に貢献する人々は、皆吾々の手に觸れ得可き或る商品を提供する者ではあるま

いが、併し何れも生産的勞働者に相違ないこと云ふのである」云。(Encyclopaedia Britannia, 1810, 4th edition, vol. xvii, p. 112.)

然らばシェイムス・ミル、ロバート・マルサス、デヴッド・リカード等所謂英國正統派經濟學者は、右の大英百科辭典第四版中に於ける「經濟學」なる項目の執筆者の言の如く、果してスキスの生産的勞働説を無用視したであらうか。是れ次に私の窺はんと欲する所である。

佛蘭西經濟學に於る 價值論の發達 (三)

津田 誠一

正統學派の佛蘭西に於る代表的權輿 Jean

Baptiste Say (1767-1832) は異邦の思潮に浸潤

するの餘り、勢ひ故國の傳統に疎遠の謗りを免

れず Physiocrates の殘黨 Dupont de Nemours の

如き此點に關して屢々露骨に嫌厭の情を表白し

たるが、獨り價值論に於ては聊か趣きの異なるも

のあり。即ち Smith, Ricardo の客觀價值説と

Turgot, Condillac の主觀價值説とを左右に顧問

し交々兩説を攝取しつつも、尙且つ效用を費用

より遙かに重しと斷ずる見解に依つて、彼れは

兩者を折衷したりと云ふよりも寧ろ後者に傾倒

した。是れと同時に従前對立拮抗せる兩種價值

論の葛藤は漸く爰に終熄を告げ、將に第二期建

設の時代に遷らんとする轉機に到達せるものである。

Say も亦た價值の考究を専ら交換價值にのみ

限局する。曰く「物の價值或は交換價值或は評

定價值とは、人が是れと交換に於て收受し得

る所の、價を附し得可き他物の分量である」

(Épitom des principes fondamentaux de l'Économie

Politique, — petite édition Guillaumin, p. 185)。

交換は交換の行はれ得る能力が物の價值を決定

するに必要なは、人の認むる所である。「所有

者が全然單獨にて其所有物に賦與する價值は、

所詮獨斷且つ曖昧である。即ち所有者は事實毫

も富裕となる事無くして、其所有物を過大に評

價する事が出来やう。然るに一旦他の人々が此

物を獲得せんが爲に、同じく價を具備する他物

を是れと交換に於て與ふ可く諾する時は、其與

ふるを諾する後の貨物の分量が前の貨物の價值

の尺度である」。(Traité d'Économie Politique, ou

Simple Exposition de la Manière dont se forment,

se distribuent et se consomment les Richesses,

5e édit. Rapilly, tom. I. pp. 2-3)。

即ち物の價値が確定する爲には「反對の利益を有する他人

との間に折衝が行はれねばならぬ。此他人は此物に欲望を有し且つ之を取得する爲には、何等かの犠牲を支拂はざる可からざる人である。更に換言すれば「各貨物の價值は是れに欲望を有する人即ち其需要者と、之を生産する人即ち其供給者との間に爲さるゝ相背馳する評價に由來する。」(Epitom, — petite éd. Guillaumin, p. 186)。此「社會的價值 Valeur sociale」のみが獨り經濟學の問題たり得るものである。」(Cours complete d'économie politique pratique, Guillaumin, 1840, tom. I. chap. I. p. 65, 66 et 69, chap. II. p. 70, 71 et 72)。

價值の基礎に二あり。其第一は效用である。「效用とは經濟學上に於ては其如何なる態様を以てするを問はず人間に役立つ可き、物の具有する能力である。如何に無用の物乃至不便の物を雖苟くも人が是れに價格を賦與するが如き

用途に供せらるゝ以上は、爰に謂ふ所の效用を有す。此價格は人間が判斷して物が具有すと認むる所の效用、或は人間が其消費より抽出する所の満足の尺度である—故に效用は該生産物に對する需要の基礎を成し、隨つて其價值の基礎を成すものである。」(Epitom, pp. 184-185)。價值は又絶對的にあらず相對的である。其はそれ自身に於て存在するものにあらず。其は諸物の自然的資質に倚賴するにあらず。却つて「精神的性質」 *qualité morale* を有するものである。是れ價值は其根據たる欲望に從つて「不斷に變動する事を本質とする」所以である。洵に價值は十人十色である。「或る者は美衣よりも美食を擇ぶ可く、或る者は美食よりも美衣を擇ぶ可し」。蓋し價值は效用に基き效用は欲望に基き欲望は、風俗・慣習・年齢・趣味・情欲・性癖等に依つて異同あるが故である。道學者の眼には指環は

無用の物ならんも、經濟學者の見地よりすれば人間が是れに享樂を見出す以上は、其は價值を取得するのである。「虚榮も尙饑餓に匹敵する緊急なる欲望を持ち得可し」(Cours d'économie politique, tom I. chap. I. p. 69. chap. II. p. 71 et 72, chap. III. p. 81 et 82)。

乍併斯くの如く「物の有する價值の第一の基礎は其效用に外ならざれども、然も必ずしも其價值は其效用の水準にまで上騰するものにあらず。其は唯だ人力に依つて此物に與へられたる效用の水準にまで上騰するに過ぎぬ。此效用の餘剰は自然の富にして無償である。」(Cours, Paris 1828, 1^{re} partie, chap. III. pp. 166-167)。凡そ「吾人の欲望の或る種類は空氣・水・陽光の如くに、自然が無償を以て供給する貨物の使用に依り充足せらる。其支出を爲すは自然のみなるが故に之を自然的富と名付くを得ん。而して其は全人

に無差別に與へらるゝが故に、人は之を獲得するに何物かを犠牲に供して價格を支拂ふの必要無し。隨つて其は毫釐も交換價值を有する事無し。是れに反して他の欲望は無償にては取得するを得ざる、即ち人類の生産の成果たる幾多の貨物を使用するにあらずんば、之を充足するを得ず。」是等の諸物こそ眞の財にして其價值を認するものは社會的現象たる交換なるが故に、吾人は之を社會的富と稱するを得可し。而して此社會的富のみ獨り科學的研究の對象たるを得。蓋し獨斷的ならざる價值を具有するは唯だ是れのみなるを以て、ある (Traité, 5^e édit. Rapilly, tom. II. pp. 157-185)。斯く物の價值

は其の效用中唯だ人力の作爲の結果たる部分にのみ比例して定まると云ふ事實よりして、價值と生産費との關係は發生する。即ち價值の第二の基礎は生産費である。其は需要の範圍を限

定する。蓋し物の價值が生産費以上に騰る事甚だしければ、需要者は自ら之を製するを以て利ありと爲し之を需要する事を停止す可く、又價值が生産費以下に降る時は生産の繼續不可能なる可し。而して物の價值が恰も其生産費に合致する時は、之を其「眞實價格」或は「本源的價格」*Prix réel, ou originale* と云ふ (*Épitom, petite édit. Guillaumin, P. 186, 185, et 161*)。

以上は概ね Say 自らが經濟學の諸原理を要約せる “*Épitom des principes fondamentaux de l'Économie Politique*” を骨子として窺へる其價值論の大様にして、單に前叙の演述をのみ通覽する時は彼れの價值論は寧ろ客觀的色彩の濃厚なるかの觀あり。如何となれば效用が唯だ價値の前提條件なりと云ふに止らば殆ど誰しも認容する事實にして、異説の分歧する要點は價値の大小を決定する原因如何に存するに、Say は

一見之を生産費なる外的事象に求むるが如くなるを以てある。然るに吾人が彼れの所論を以て費用價值説にあらざるは勿論、費用價值説と效用價值説との衡平なる折衷とすら認め難く、所詮彼れを *Davenport* と共に初期效用價值論者の一に算入せんと欲する所以は那邊に存する乎。其は彼れの代表的著述を味讀する時、價値に關聯する效用と費用との間に絶大なる差等を設け、前者を以て後者に比較し本質上遙かに重要なりと思惟する見解を、隨所に看取するが故である。試みに其顯著なる例證を擧げよとならば、效用が價值の第一の基礎たる事を力説せる箇所の脚註に於て、「時價 *prix courant* が繼續的態様に於て生産費以下に低落する事無かる可しと云ふは、甚だ眞なり。斯かる際は人は其製作に力を致すを欲せざる可し。乍併尙且つ消費者が物に附するを肯んずる價格を決定するものは

人が其生産に要せる費用にはあらず。其は唯だ偏に *uniquement* 其效用である。蓋し效用無き物を生産する爲に如何に巨大の困難を克服するとも、人は之を支拂ふを肯んせざる可し。恰も泉の前に容器を置く時、容器の周邊は假令液體が特定の高度以下に低下することを妨ぐと雖、尙其は其満ふる水の汾湧を惹起する因にはあらざるが如し」 (*Traité, 5^e édit. Rappily, tom. I, p. 6. en note*) と云ひ、又地代に關説せる一齣に於て「是れ吾人をして既に確立せる原理、則ち生産費は物の價格の原因にあらずして、此原因は該生産物が満足せしむるを得る欲望中に在りと云ふ原理に、再歸せしむる所以なり」

義に於ては、之を生産費に求めたりとも斷定し難き理由がある。Say が價值の問題に關して親しく *Ricardo* との間に應酬せる數次の書簡は、兩者立脚地の異同を根本的に闡明する傍ら、這般の消息の理解に資する所が多い。

十二

David Ricardo は一八一五年八月十五日 Say 宛の書簡に於て「諸物の效用が其價值の基礎たるは争ふ可からず。されど其效用の程度は其價値の尺度にはあらざる可し。其生産の困難なる商品は人が容易に生産し得る商品よりも常に高價なる可し。假令人々擧つて後者が前者よりも一層效用有りと認むる場合に於ても尙然り。一生産物が價值を持つが爲には須らく效用無かる可からずと云ふは洵に正し。されど其生産の困難のみが獨り其價値の尺度たるなり」 (*Oeuvres diverses de J. B. Say, édit. Guillaumin, 1848, p. 409*)

の眞意を掬するに足る。而して更に價値の原因より價値の尺度に轉向するも、彼れは假令之を效用に求めざりしとは云へ同時に亦た窮極の意

と論じ、價值の原因が效用たるには敢て異議なきも其尺度は費用を措いて他に求め難しとなすの見解を披瀝したるが、是れに對する Say の回答は同年十二月二日付の返書に其一端を窺はる。曰く「貴下は余が效用は價值の尺度なりと言明したりとて譴責せられたり。乍併余は常に人間が一物に附與する所の價值が、彼れが其中に見出す效用の尺度なりと云へりと信す。余も亦た貴下と等しく一生産物の價值は、其生産の困難なるが爲に費やせる所以下に低落する能はざる事を認む。若し人々が其效用が所定の價格に匹疇すと思惟する時は、彼等は之を生産す可く、又若し其效用が其價格に匹疇せずと思惟する時は彼等は之を生産せず」(op. cit. p. 412)。

以之觀之 Say は周到なる注意を用ひて、效用を價值の尺度と爲さず逆に價值を效用の尺度と主張するものである。其眞意を忖度するに效

用は價值を決定し價值の原因となる。而して原因の量が其結果たる積より逆に推知せらるゝ一般的原理に依つて、效用は價值の中に其尺度を取る。效用は純然たる個人的事項なる故に、市場價值を表示又は測定するを得ない。乍併其は需要を通して市場價值を決定する。斯くて又此市場價值は其精確なると精確に近きとを問はず一物の效用に對する社會的或は一般的鑑賞を明かにす可き唯一の表彰手段、唯一の共通指示者であると云ふに歸着する(Davenport: Value and Distribution p. 109)。Ricardo は前掲の Say の回答にも尙納得せざりしもの、如く、一八二〇年十月十日 Malthus に與ふるの書中に於ても依然 Say の價值論に關して同趣意の攻撃を反覆し、「彼れが一貨物は其效用に比例して價值ありと主張するは、慥に價值の何を意味するかに關して正確なる觀念を有せざるものなり。若し買手

のみが諸物の價值を支配するものとせば、此は眞なる可し。然る時は洵に吾人は凡ゆる人々が進んで貨物に與ふる所の價格が、彼等が是れに對して抱ける鑑賞の度に比例す可きを期待して可ならん。乍併事實余の見解に従へば、買手は抑々此世に於て價格の支配に最も關係薄きに似たり。其は全然賣手の競争に依つて行はるゝ所にして、如何に買手が眞に進んで黄金よりも鐵に對し一層高價を支拂はんを欲するも能はざる可し。蓋し供給は生産費に依つて支配せられ、

は唯だ價值は效用の尺度なりと云ふに過ぎず。畢竟する所此も亦た Say が之を認識したるや否やは明瞭ならずと雖、效用は純然たる個人的範疇に屬し、一人に對する效用を以て他人に對する效用を律す可からざるが故に價值は效用に比例するを得ず。唯だ需要に影響する事を通じてのみ效用は價值に關係する事を得と云ふに止まるが如くである(Davenport: Value and Distribution, p. 111)。

かるが故に假令黄金は恐らく全人類に依つて其の效用鐵に劣れる金屬と看做さる可しと雖、尙且つ兩者の(價值の)比例が現状の如くなるは避け難き所なる可きを以てなり」(Letters of Ricardo to Malthus, edit. Bonar, pp. 173-174)云爲すれども、然も Say が價值は效用に比例すと思惟せるや否やは疑問にして、彼れの趣旨

然らば費用を以て價值の尺度と爲すは不可なる乎。先づ Say が勞働説を極力排斥せるは疑ふの餘地無き所である。乃ち彼れは嘗て Ricardo を非難して、勞働の價值が生産物の價值を決定すと云ふが如きは、「是れ余の全力を盡して論破せんと努むる見解なり」と稱せるに對し、Ricardo て一八二〇年一月十一日付の書簡に託して辯明を試み、「貴下は余の命題の一を誤解せ

られしが如し。余は生産物の價值を支配するものは労働の價值なりとは云はず。斯くの如きは余の能ふる限り撃滅せんと欲する意見なり。余は生産物の相對的價值を支配するものは、生産に必要な労働の相對的分量なりと稱するなり」(Oeuvres diverses de J. B. Say, p. 414)と陳述したるが、Sayは毫末も此釋明に満足せず却つて同年三月二日更に書を寄せて反駁して曰く、「余は貴下に告げん。余は貴下が生産物の價值を決定するものにはあらずる労働の價值と、生産物の價值を決定する所の其生産に必要な労働の分量との間に設けらるゝ相違を充分理解する能はず。蓋し余の見る所に依れば、貴下が労働の量及び質を決定し得るは、人が之を收受する爲に支拂ふ價格に依るにあらずんば能はざる可きを以てなり」(op. cit. p. 415)。其意味する所は労働と雖其が何等かの本源的基礎的な

る同性同質の要素に還元し得る事を證明せざる限り、其所謂相對量を比較する以前に當つて先づ是れに交換價值を附し、此交換價值に準據してのみ始めて比較を行ひ得るものである。然るに其際は労働それ自身が既に尺度を收受する道理である。故に労働を以て價值の尺度と爲すは不可能なりと云ふのである(Davenport: Value and Distribution, p. 110)。

最後に假令労働説は排斥するも廣義の生産費説は如何に見るや。Sayの意見に於て企業家の勤勞が價值に對する關係如何は未だ甚だ審らかならずと雖、此點を姑らく除外する時は、例へば「生産物に歸屬せる效用が之を獲得せんとする希求を促進する限り、其價格は各市場に於て生産費に依り決定せられたる限界に於て成立す」(Traité d'Economie Politique, Livre II, chap. i, 8e edit. Guillaumin, p. 333)と云ふるが

如き、一應生産費説を是認せるが如き觀無しとせざるも、然も爰に於てか生産諸要素 *fonds productifs* の價格を決定する原因を探索する必要ありと爲し、之を究めて曰く「是等生産諸要素の時價は、他物の價值と同一原理に基いて成立す。乍併其需要せらるゝ分量は其動機を消費の満足に發する能はず。蓋し田圃・工場の種類は直接其所有者に對して、何等の満足をも確保するものにあらずるを以てなり。故に彼等の價值は彼等より抽出し得る生産物の價值より來る。而して此生産物の價值は又それ自身が此生産物に依つて爲され得る用途、即ち是れより抽出し得る満足に依頼す」(Ibid. p. 367)。畢竟 Sayの學說に従へば效用は本源的地位を占め費用は是れに逆抗するものにして、此費用は雇傭生産要素の負へる價值に依つて決定せられ、成る程生産物の價值を決定するに似たれども、更に翻つ

て考察すれば、逆に此生産要素の價值其物が是れより生ずる生産物の價值に依つて、直接に決定せられ、結局此生産物の價值は其欲望満足に換言すれば其效用に基くとなすものなるが故に、是れ明かに生産費の影響を否定し價值の決定を全然効用に置くものと云ふ可く、假令彼れが各生産費の價值が其生産物の價值に比例する事を主張したればとて、直に價值の尺度を生産費に見出せりとは推斷するを得ざるものである(Davenport: op. cit. p. 113, p. 115)。

固より此所説は後に重要な補遺を蒙らざりしにあらず。曰く「凡そ労働・土地・又は資本を支配する者は、吾人の生産的勤勞と呼ぶ所の貨物の商人である——企業家は一生産物に對して存する需要に基き、之を製作するに必要な生産的勤勞に價を附する所の仲介者に過ぎぬ。種々なる生産物の生産に必要な費用と價格とを比

較する事に依つて、企業家は其孰れの生産物を生産す可きかを決定し、以て凡ゆる生産的勤勞に對する需要を確立し、斯く需要の側よりして是等勤勞の市場價值に到達す可き基礎を供するものである。而して提出せらるゝ勤勞の分量が供給の側に於る其價值の基礎であると (Traité, 8e. edit. Guillaumin, p. 372)。即ち前言を翻へして後説に従へば、生産の諸要素は其價值を直接生産物より取るにあらずして、企業家の活動に結合せられ是れと共に協力し且つ是れに雇傭せらるゝ所の、價值生産に於る要素として其價值を取るのである。かるが故に是等生産諸要素の收受する報酬は、假令其各々を個別的に精確に推知し得らるゝものとしても、嚴密に其生産物の價值なりと云ふを得ず。其は唯だ單に價值生産に於る彼等の協力の市場價值に過ぎぬ。是れ明かに前者と區別す可きものである。今是れに

價值なり」と云ふに歸着する。吾人は是れに對抗して、若しくは其曖昧なる點の修訂として、報酬が企業家を通じて收受せらるゝ場合に於ては、各生産要素の生産せる價值は果たして幾許なるや之を明細に知るよし無く、又よし之を推知し得可しと假定するも、其報酬が其生産物に均等若しくは比例す可きを信す可き、學理的保證は毫も存在せざる事を記憶しなければならぬ (Davenport: op. cit. pp. 115-116)。

既に然る以上は再び前問題に立返つて前述通りの理由に依り、Sayは窮極の價值尺度を生産費に求めしものにはあらずと云ふ最後の斷案を下すとも、敢て不可無き道理であらう。洵にSayは價值の決定に關して徹頭徹尾需要の側に重きを置き、隨つて效用を強調する事甚大に、一方供給の側をも當初より無視する事無く、生産費に考慮を拂ひ「自然價格」なる觀念をすら抱懷

基いて Say の所説を極めて同情的に解釋する時は、最近價值學説の領域にまで進歩せるものと見れば見られる。乍併斯くの如き同情的解釋は、疑ひも無く彼れ自身の洞見せざりしものを其學說中に掬するものである。事實生産要素の價值に關する彼れの説明は、其れが學理的には直接生産物の價值に嚴密に比例すと思惟するの誤謬より遂に脱却するを得なかつた。蓋し彼れは依然直截なる言明を爲す事なしと雖、要するに種々なる所得の分配は假令如何様に受容せらるゝとも、詳言すれば其實物報酬なると金錢報酬なる、乃至賃銀なると地代なると利子なることを問はず、總て企業家を通じて抽出せらるゝものではあるが、乍併此所得が如何なる態様に於て收受せらるゝを問はず、其は常に同一の道理に照らされ、而して其源泉は常に生産せられたる

したりと雖、之を輕視し是れに論及する事少く、英國流の通説とは實に天淵の軒輊を示してゐる。而して其所論の精髓は價值は效用の尺度にして、價值其物は「或る物が他の或る指定の物の特定の分量と同一程度に鑑賞せらるゝ事を示す」 (Traité, 8e. edit. Guillaumin, Livre II. chap. I. p. 333) と云ふ以外に、何等特殊の尺度を有する事無しとの趣意に要約せらるゝもの、如くである (Davenport: op. cit. p. 110)。

最後に附言を要するは Say が自から意識しつゝ、全然使用價值を無視せる事實である。彼れが一八二一年七月十九日 Ricardo宛の書簡に於て、「余は貴下が Adam Smithと共に使用價值と稱する所のものを認容する能はず。效用價值 *Value en utilité* (即ち使用價值 *Value in use*) は單に純然たる效用にあらずして何ぞや。然らば效用の一語を以て事足る可し。然も效用のみ

にては未だ余に價值の觀念を興へず。蓋し研究の結果余は各生産物中には、自然が無償にて吾人に供給する效用の部分と吾人が作り出す部分との存在する事を看取する故である」と云ひ、或は「貴下は『Say氏は常に效用價值(即使用價值)と交換價值との間に存する本質的差別を閑却せり』と云爲せるが、疑ひも無く余は之を無視す。如何となれば經濟學に於ては、吾人の携はる所は費用を掛けて興へられたる效用の部分のみなるを以てなり」(Oeuvres diverses de J.-B. Say, p. 419, p. 420)と云へるは、此事實を明示せるものである。Sayに續くDrozの價值論も此點に關しては多くを出でない。

十三

Joseph Droz (1773-1850) の "Economie Politique ou principes de la science de Richesses," 1828は小冊乍ら流麗なる筆致に託して卓越せる

て進んで他物を興ふる爲には、其物の獲得に何等かの障礙を發見せざる可からず。水は通有なるが故に吾人は是れに支拂はず。吾人は之を吾人に齎らす人の勞働に支拂ふのみ。然し若し其が稀少となるに於ては之を購買せざる可からず」と爲し (pp. 18-19)、其脚註に於て既掲の Condillacが、假令河流沿岸の水と雖之を掬汲するの勞働を要するが故に價值ありと云へる言辭を引用したる後、其缺陷を指摘して、「余が水を掬汲する爲に行ふ輕微の勞働は、洵に水が效用を有する事を證明するも、余が掬汲せる此水と交換に於て若し人が余に何物をも興ふる事を肯んせざるに於ては、其は價值を伴はず」(p. 19, en note)と批判し、畢竟「效用と稀少性とは價值の二要素なり。後者が前者に代位するが如くに見ゆるは幻想なり。豪奢なる店舗に輝く寶石・裝飾品の如き無益の物は毫末も效用無しと人は云

經濟理論を展開してゐる。其價值論を一言に盡せば價值本質論に於て佛國傳來の效用重視を飽くまでも嚴守つゝ、價值變動論に於て英國流の費用說の影響を漏洩する。其要旨を摘出するに「幾多の物の具有する吾人の欲望に役立つ資性、之を效用と名付く。各人が之を獲得し得る程に爾く豊富に普及せる諸物の效用は、毫釐も價值を有する事なし。價值は交換を受け得る諸物の性質なり。效用は價值を伴はずして存在し得れども、價值は其必須の基礎として效用を持たざる可からず。人は效用無き物に一物をも興ふるを欲せざるも、幸運なる發見に依り其物が自然的又は人爲的欲望を充足し得る事明かになる時は、其は恐らく異常の價值を獲得す可し」(Economie Politique, Livre I. chap. III. pp. 17-18)。乍併「效用が價值の唯一の基本にはあらず。人が效用ある一物に對し是れと交換に於

へども、余の定義せる效用は吾人の欲望を満足せしむ可く或る物の具有する資質の謂ひにして人爲的欲望は自然的欲望に匹敵し、否之を凌駕する事すらあり得可し」(ibid)とて其本質論を結んでゐる。彼れは次で經濟的價值と倫理的價值との異同に關して稍冗長に過ぐる言説を費やせる後、價值變動論價格論に轉向して曰く「商品の評價は一見せる所専恣なるもの、如くに、換言すれば或る購買者と或る販賣者との欲望に専ら倚賴するが如くに、隨つて其結果同一時期同一市場に於て同一種類の諸物に對しても、人は甚だ異なる價格を支拂はんとするもの、如くに見える。乍併事實は然らず。各々の商品の價值は一般的に固定せられ、且其變動する時に於ては其高低は同じく一般的態様に依て決定せらるゝを見る。然らば此齊一なる評價の現象は如何にして行は

や。凡そ一商品の製造には經費を要す。企業家は或は原料を買入れ或は給料を支拂ふ等様々の支出を爲す。此經費は製造品の價值に入る可き前拂である。生産者が此品を賣却する時、彼れが此前拂を償還せられ且つ毫末も其れ以上を收受せざるに於ては、彼れは之を製造價格 *prix de fabrication* を以て賣却するものである。乍併彼れは合理上一の利潤を望むに相違無し。前拂の合計と此正當なる利益とが一商品の眞實價格 *prix réel* を構成す (op. cit. pp. 25-26)。

されど *Droz* は一商品の時價が此眞實價格より或は高く或は低く乖離する事實を認め、随つて價格の決定には前叙の素因以上に有力なるものありと爲し、之を所謂需要供給の法則に求める。乃ち云ふ「買手は其取引する諸物の製造に要する費用を考慮する事稀にして、賣手が若し其商業上に何等の害無く價值を釣上げ得る場合

に價值が正當の利益以上に騰貴する事を自制するが如きは尙更稀である。商品の供給豊富にして需要尠少なる時は、幾多の賣手は撰擇に預る事を熱望するが故に、買手が價格を低落せしむる支配者たる可きは明かである。是れに反して需要莫大に、供給は之を完全に満足せしむるに餘りに稀少に過ぐる時は、今度は賣手が有利の地位に立ち取引の支配者となる。故に時價 *prix courant* を決定するものは需要と供給との釣合なり」云 (op. cit. pp. 26-27)。

最後に彼れは然らば眞實價格と時價との關係如何と云ふ問題に入りて、這個の對立を設けし者の多數が歩めると同一の軌道を進み、前者は後者を牽引して相投合するの傾向ありこの見解を表示する。乃ち前段に語を續けて云ふ「此争ふ可からざる事實を認めたる後、事物の情勢は時價を眞實價格に結合す可く不斷に戦ふ事を觀

察せん。實際上若しも商品の過剰が時價を甚だしく低落せしむるに於ては、幾多の製造業者は其勞務と其資本との爲に他の事業を求む可く、又他の人々は其製造を差控える。爰に於てか生産物の分量は減じて略ぼ需要の水準に復歸する。若し又其反對に買手多く製造者少き爲時價が著しく騰貴するに於ては、販賣の確實性は生産の一層の増加を激勵し、其高大なる利益の割讓を期待して新たな生産者を生じ、商品の分量は増加し、其豊富なる事の結果は眞實價格への合致である」云 (op. cit. pp. 27-28)。

今如上の所論を通觀するに語簡にして意盡さざるの點尠なしとせず。例へば效用が物の絶對性なるや相對性なるやを明示せざるが如き、價值が比較的觀念なるを切言せざるが如き、就中 使用價值に寸毫も論及せざるが如きは、欲望、效用、使用價值、交換價值の連鎖に關して吾人

を充分に首肯せしめざるの憾みがある。然も其價值本質論に於ては效用を第一義と爲し、是れに稀少性の隨伴するに及び始めて價值發生の條件の完備す可きを力説し乍ら、其價值變動論に至つて平均利潤を併合せる生産費を以て、市場價格の上一下を掣肘する眞實價格の基礎と看做すの點に於て、英佛兩流の折衷的傾向頗る顯著なるを否む可からず。是れに比較する時は *Rossi* の見解は、其使用價值を重視する事に依つて *Say*, *Droz* の短を補ひ、其價值決定に關し需要側に主因を求むる事に於て、*Say* と共に *Droz* よりも一層主觀的分子を多量に包藏し、隨つて舊慣を墨守する事更に嚴格である。

十三

其血統を伊太利に承けて後國籍を瑞西に轉じ更に佛蘭西に歸化せる *Pellegrino Luigi Edoardo Rossi* (1787-1848) が、其波瀾數奇の生涯に於て經

濟學界に寄與せる文献の尤なるものは、生前一八四〇年より四一年に亘つて前二卷を公刊し、死後一八五一年乃至五四年に後二卷を追刊せる「Cours d'Economie Politique」全四卷である。

其價值論を簡約すれば、本能並に明智に従つて人類は其欲望の充足に適する諸物と、然らざるものを區別する。前者は效用がある。人は之を探索し之を尊重する。後者は效用がない。人を之を拒否し若しくは之を無視する。效用ある物を吾人の欲望に適用するには、直接と間接との二途が有り得る。吾人が之を所有する時は自己消費に依り直接である。吾人が之を獲得せんとする時は交換に依り間接である。此交換は唯だ無限の分量に於て存在せざる效用に關してのみ想像し得る。若し何人も之を缺乏せざるに於ては、人は之を獲得するに交換を思はざる可し。他人の所有に係る物を取得せんとする希求

と方法、爰に交換の事實は含まれる。效用・稀少性・移讓性 transmissible、爰に交換價值の前提は存する。

第一に價值は效用に倚賴する。此效用は又其れ自身が吾人の欲望の種々なる範圍、並に其相對的強度に從屬する。價值はかるが故に「不變恒久の物にもあらず、又諸物に内在せる性質にもあらず」。一物と一欲望との間に存する缺乏感充足の關係を廢除すれば、使用價值は消滅し、是れと共に交換價值も亦た消滅する。如何なれば交換價值は使用價值と同一の根元に發する故である。「交換價值は使用價值の一形態に過ぎぬ。使用價值無くば交換價值無し」(Cours d'Economie Politique, 3e leçon, pp. 54-58, Passim)。Adam Smith 並に其繼承者が使用價值を純粹なる普遍性と看做し、端緒に於て寸言を費やすに止まり、忽ち之を遺棄して復た顧ざるが如きは

是れ之を蔑視するの甚しきものである (op. cit. 4e leçon, p. 65 et 66)。

第二に稀少性に關しては Rossi は單に斷片的に意見を洩らせるに過ぎざるも、尙且つ精緻正當である。彼れは Smith が金剛石は其使用價值に不釣合なる交換價值を有すと云へる言辭を捉へて其非を稱へ、效用は「自然的なると人為的なるど、永久的なると一時的なると、肉體的なると精神的なるとを問はず、一の欲望を満足せしむる資質である」事、金剛石の價值は其充足する欲望の「強大潑洩」なるに基く事、金剛石は「貴顯の表徴、富裕の刻印、裝飾の手段」たる事、約言すれば其交換價值は其使用價值に、則ち「其れが其所有者に致すと思惟せらるゝ奉仕」に比例する事を主張する。然る後彼れは是れに附言して金剛石の稀少性其物が人の嗜好を牽引するに役立つ所以を述べ、「稀少性は此場合

欲望満足の直接手段である。蓋し其は他人の所持せざる物を所持せんと希求より成る所の、吾人の天性の欲望を鎮撫する故である。此欲望は道學者の非難する所、理性の須らく正當の限界内に控制せざる可からざる所なれども、然も實際に於ては此欲望を満足せしむる爲には、人々は大きな犠牲を支拂ふを敢て辭せざる所のものである。(op. cit. 4e leçon, p. 74 et 75)。淘に高級なる奢侈品に於ては、其稀少なる事實自體が直接是れに對する嗜好を刺戟する意味に於て、稀少性が效用の一部を成すの觀あれども、Rossi は更に進んで稀少性に獨立の地位を與へた。以爲らく、價值の消滅する極點二あり。假令數字的に甚だ稀少なりと雖何等の役に立たざる物は毫釐の價值無し。反對に物理的には大なる效用ある物と雖、例へば空氣の如くに、過剩なるに於ては同様に價值無し。價值は效用と稀

少性との結合の結果である。或る物の稀少性愈々甚しきを加ふるに従ひ、又其物の效用愈々増大するに従ひ、其價值は益々上騰する。是れに反じて或る效用ある物の愈々豊富を加ふるに従ひ、又其物の效用の愈々減少するに従ひ、其價值は益々下落する。Rossi は更に數學的稀少性と經濟學的稀少性を混同しなかつた。曰く「總て效用ある事を停止せる物は、其存在量如何に輕微なりと雖、稀少どころか饒多である。人々は之を需要せざるが故に其は欲望を超過する」と。但彼れは是れよりして Conciliac の如くに、物は單に效用あるの故を以て直に交換價值を生じ得可しと演釋するの誤謬より免れた。

結局「交換價值が二個の源泉より發生するは爭ふ可からず。吾人の希求を満足せしむ可く諸物の具有する所の資質、並に其分量と吾人の欲望の總和との不均衡是れなり」と云ふのである

(Op. cit. 5^e legon, p. 83 et 84)。

第三に然らば移讓性は如何、交換可能ならざれば交換價值無し。是れ自明の理のみ。加之「交換價值は實際上交換の瞬間其物以外には存在せず」。其は持久的ならず不變にあらず。新たなる交換は之を修訂し得可し。乍併價值は交換以前に存在す。換言すれば「一物が使用價值を有する以上は、交換價值は可能である。唯だ其は交換の瞬間以外には、實現せられず認めせられず決定せられざるのみ」(Op. cit. 3^e legon, pp. 50-50)。

かるが故に交換は價值を創造するものにあらず、之を表現するに止まる。其は對等の關係則ち「與へられたる瞬間に交換當事者の意中に於て、交換せらるゝ二物の内其一は他の一に匹敵する事を顯はすのみ。交換價值其れ自身は是れ以上のものにもあらず是れ以下のものにもあらず」(Op. cit. 4^e legon, pp. 73-74)。

Rossi は更に進んで所謂需要供給の法則の所餘皮相の觀察に過ぎざるを切言する。即ち交換價值は需要に正比例し供給に反比例して變動すと云ふ公式は、單に事物の外的現象をのみ説明するに過ぎざる淺薄狹小の見解である。若し吾人にして結果に停頓せずして原因に溯り、表面に顯現せる機械的事象の底に之を生み出す窮極の因由を探らんと欲すれば、「問ひ質す可きは人間である」(Op. cit. 4^e legon, pp. 77-78, 5^e legon pp. 84-86)。

需要の背後には之を刺戟する精神的力、之を決定する願望の強度が潜在し、供給の背後には其支給の爲に費やす努力の難易が伏在する (Op. cit. 5^e legon, p. 89 et 90)。

而して最後に其孰れの側に取つても、「交換は物々取引の間接的用途を辿つて其満足を得んと求むる所の欲望の、表現であり結果である」。且つ此基本原理の價格變動の上に及ぼす作用に關しては、

「畢竟」en dernière analyse 「交換價值は使用價值に倚賴す」との結論を彼れは下した (Op. cit. 4^e legon, p. 78; Turgeon: Valeur d'après les Economistes Anglais et Français, pp. 386-390)。

以之觀之 Rossi の價值論は佛蘭西學派の傳統を固執し、主觀的色彩心意的傾向の顯るなるものがある。然らば彼れには英國流の影響は絶無なりし乎。あらず。蓋し彼れは交換價值の複雑にして且つ其全く相對的なる事實を認識したりと雖、尙價值問題の解説に簡單なる方式を求めざる可からずと思料し、之を一種の費用說に於て見出した。即ち何等の制限無き競争の場合に於ては、其は實際上完全に行はれ難き所なれども、價格は一定の水準に牽引せらる。此水準は生産費に依つて決定せられ自然的なる價格の基礎を成すものである。生産費は Rossi に從へば、勞働賃銀・資本利子・資本償却費の總和

にして地代は是れより除外せらるると云ふのである (op. cit. tom. 1. 3^e leçon, etc.)。乍併彼れは自著の後卷に於て、此際人は生産者の投下せる費用にあらずして、消費者が若し彼れ自身之を生産せんと欲する時に投下せざる可からざる費用」を考ふ可しと爲し、飽くまで需要者の立脚地に歸還する事を忘れなかつた (op. cit. tom. III. 5^e leçon; Rudolf Kautsky: Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Wertheorien, S. 202)。況や前掲の如く價值變動論の結論として、

「交換價值は使用價值に倚賴す」と云ふ決定的言明ある以上は、彼れを主觀價值論の忠實なる遵奉者と云ふも敢て不可無き道理であらう。更に此點に關しても一七深く探るに於ては、彼れが使用價值に就いて其彼此比較の觀念なる事に寸毫の言及をも爲さざるが如きは、或は Rossi が使用價值と效用とを混同せるにはあらざるかの

疑問を招致す可き理由無しとせざるも、然も假令兩種觀念の混同實在したる場合に於ても、交換價值の變動の窮極原因を使用價值に求むるか效用に求むるかの相違あるのみにて、彼れが常に需要側を重視し心意的主觀的分子の濃厚なりし事實には何等之を覆へす可き影響を與ふるものにはあらざる事を記憶しなければならぬ。此間に處して Bastiat の學説は其内容よりも其演述に於て異色に富めるものであつた。

十四

Frédéric Bastiat (1801-1850) の隨一の文獻「Harmonies Economique」の上梓は著者易簣に先立つ僅かに五年。其價值論を如何に要視せるかは「價值論の經濟學に於るは、猶ほ計數の算術に於るが如し」(Harmonie Economique, Oeuvres complètes de F. Bastiat, edit. Guillaumin, p. 140) と云へるに徴して推知す可し。其綱要

を摘出すれば、凡そ人類の社會的生活は苦痛たる欲望、之を驅除する努力、及び快樂たる満足の反覆循環連續である。然るに此内欲望と満足とは純個人的なる感覺にして、之を移讓し難く之を比較し難し。唯だ獨り其中項を成す所の努力のみが移讓可能である。吾人は他人の欲望を感ずる能はず、吾人は他人の満足を感じず、乍併吾人は相互に勤勞を提供する事が出来る。此勤勞の移讓こそは經濟學の根本對象たる價值の抑々の因由を成すのである (op. cit. p. 143)。然るに他方に於て欲望満足の力則ち效用の中には、自然に依つて無償に與へらるゝ部分あり人間に依つて有償に取得せらるゝ部分あり。價值の發生し得るは前者にあらず唯だ後者のみ。斯く二方面より相異なる二途を辿つて吾人は、價值は人間が彼等の欲望に満足を與ふる爲に爲す所の努力を取扱ふものたらざる可からず

この結論に到達する (pp. 133-134)。最後に價值は唯だ社會生活に於てのみ存在し得る。其理由は簡單である。即ち價值は本來比較評價秤量を意味する。然るに二個又は二個以上の物が相互に他を秤量するが爲には、其は相互に通約し得る Commensurable ものたらざる可からず、隨つて又是れが爲には其は同一性質のものたらざる可からず。孤立單獨の場合に於ては如上の意味に於て勤勞を比較し得るもの無し。然らば社會生活に於ては如何。人は爰に一人の努力を以て他人の努力と比較す可し。是れ同一性質の、隨つて通約し得可き二個の現象なるを以てなり。斯くして價值なる語を正當に定義するには、其は單に人間の努力にあらずして、交換せらるゝ若しくは交換せられ得る人間の努力を取扱ふものなる事を知らざる可からず。交換は價值を確認し價值を秤量するより以上に出で、價

値に存在を與ふるものである。余は交換が、諸行爲並に諸物に存在を與ふと云ふにあらず、其が價值なる觀念の存在を與ふと云はんを欲するなり。然るに又二人が相互に現實の努力若しくは以前の努力の結果を讓與するに際しては、兩者各々が他に勤勞を致さざる可からず。爰に於てか余は云はん、「價值とは相交換せらるゝ二個の勤勞の割合なり」(p. 144-145)。

今如上の所説を仔細に検討する時は、吾人は此「勤勞」なる特殊の用語の中に含蓄せらるゝ内容が、實は毫末も新鮮なるものにはあらざる事を發見す可し。洵に Bastiat は、價值を以て「精神的性質」qualité morale と爲し效用を以て其本源の基礎なりと看做せる Say の學説を批判して、是れ價值の觀念を物質性の羈絆より救へる嚆矢なりと稱揚し乍ら、然も「若し Say の意味する所人間の勤勞に關する效用に止ら

羅融合し得たりと自負し、「總ての色調を有する學者は、須らく満足して可なり。余の裁斷は彼等の孰れに對しても存在の理由を與へたり。是れ彼等の悉くが眞理の幾分かを看取せるが故なり。過誤は楯の半面を觀破し得ざるに在り」(p. 103)とて、甚だ欣懷の色あるを Gide は捉へて、「吾人は Bastiat の粗朴なる狂喜に微笑を禁ずる能はざるものあり。蓋し彼れは彼れの方式が爾く首肯し易く且つ一切を這中に包容する所以のものは、單に其れが空虚なる方式なるが爲に過ぎざる事を悟了せざりし故である。其は單に合鍵 passe-partout である。其は事實價值は願望 desirabilité に倚賴すと云ふに歸し、結局其れ以上の意義を見ず」(Gide and Rist: History of Economic Doctrines, pp. 333-334)と述懐せるが、吾人は是れに左祖せんと欲するものである。而して其價值を全然物質性より離脱せる純

ば、其は平明凡庸の理 triviale のみ。蓋し勤勞 service の語源は勤勞を致す servir の意義を有する羅典語 DE にして、當然佛語の效用 Efficace に該當するが故である。乍併 Say は價值の原則をば、物を通じて與へらるゝ人間の勤勞中に於るのみならず、又自然が物に賦與せる效用ある資質中にも之を見出せり。是れ價值は人間に依り製造せらるゝのみならず、亦た自然に依りても製造せらるゝと云ふ結論に導くものなり」(op. cit. pp. 180-182)と非難すれども、其實 Bastiat の謂ふ所の勤勞に關する效用と、Say が明瞭に反覆力説せる人間の努力に依つて有價的に取得せらるゝ效用とは、本質上些の相違ある事無し。彼れは單に言葉の綾に偽むかれたるものと云はざる可からず。彼れが其所謂「勤勞」なる用語の中に従前の效用・稀少性・獲得の難易・生産費・勞働等を基礎とする、凡ゆる價值學説を網

粹の人的現象と看做すの點に於て、心意的傾向の頗る顯著なるは何人も認容する所であらう。轉じて其價值變動論を窺ふに Bastiat は依然、需要側を強調重視する。彼れは Ricardo が價值の決定因を投下勞働量に求めし見解を排し、斯くの如きは管に價值法則を人力に依つて任意に増加し得可き諸物に限局せざる可からざるのみならず、些々たる勞働の所産が莫大なる價值を取得し汝々丹精の成果が却つて無價值に歸する日常頻發の事實、更に又價值變動の現象其物を根本的に説明するを得ざるの缺陷ありと爲し、是れに對抗す可き自説を披瀝して「幾多の事情が一の勤勞の相對的重要性(則價值)を増減する。其は效用の大小に従つて増減し、之を提供し得る人の多少に従つて増減し、勞働・苦痛・熟練・時間・修習の必要等に従つて増減し、又是れに對する吾人の判斷如何に従つて増減し、更に其が

吾人自身をして勞を節約せしむる程度の大小に従つて増減す」(op. cit. p. 146)と云ひ、之を説明して曰く「若し余が海濱を逍遙して偶々金剛石を拾得せりとせば、余は是れに依つて大なる價値の所有者となる可し。其故如何。是れ余が人類に對して大なる福祉を齎らせるが故なる乎。是れ余が其爲に長期峻烈の勞働を行へるが故なる乎。共に然らず。該金剛石が爾く大なる價値を有するは、是れ疑も無く余が之を讓渡する場合に於て、讓受人が余が彼れに大なる勤勞を致せるものと思惟するに依る。此勤勞は此金剛石を希求する富者愈々多く、且つ之を讓與し得る者が唯だ余のみなる場合に於て、益々大なるものと思惟せられるのである」(p. 153)。則ち「價

所の努力乃至勤勞とは其意義勞働よりも一層廣汎なるを自稱するのみにて、其範圍甚だ曖昧なれども、假に之を勞働と同義語に解するも、價値の大小は生産者供給者の既遂の勞働量と云ふ客觀的現象に基くものにあらずして、消費者需要者が倚つて以て免れ得可しと自ら判斷する所の隨つて決して實現實施せらるゝ筈無き所の、勞働量に基くと爲すものなるが故に、是れ歴然たる主觀論と云はなければならぬ。

値法則は勤勞讓渡者の既遂の努力中に存せずして、勤勞享受者の是れが爲に免れ得る努力中に存するなり」と (p. 153)。抑々 Bastiat の謂ふ

最後に彼れは價値の適當の尺度を探索して、若し吾人の要求する所にして二個の勤勞の現實の割合如何を表示せんとするに止らば、現行の金銀貨幣を以て事足る可し。乍併科學は此處に停頓するものにあらず。其は努力と満足との割合を測定せんと欲す。而して其尺度は努力自體或は勞働の外に有る可からずと前提し、然も勞働には巧拙あり難易あり危険なるあり安全なる

あり嫌惡す可きあり魅惑に富めるあり、然らば其孰れに標準を置く可きかと自問し、結局之を最も單純粗野原始的なる筋肉勞働にして全く自然の協力より隔離し何人も之を實行し得可き底のもの、一言に要約すれば日傭取勞働者の勞働に求む可しと自答してゐる (p. 104-105)。今如上の文意を咀嚼するに其當否は姑らく措き、彼れが價値の最上の尺度を最下層勞働者の勞働に求むる所以は、恐らく此種の勞働の一定量が勞働當事者に對して齎らす所の不快苦痛が恒常不變なる一事に依れるが爲と、推測せしむるものがある。畢竟吾人は *utilité* の價值論の徹頭徹尾主觀論に終始せるを思ふものである。

是れより前世紀の後半に入りて英佛兩學界の交渉愈々頻繁を加へ、價値學說の上に於ても Baudrillard 以降の諸家は、價値の本質として效用を力説する點に於て飽くまで此國の傳統を嚴

守しつゝ、需要の背後に存する效用と供給の背後に存する費用とを、彼此調和せんと欲する傾向を漸次醸成するに至つた。(未完)。